

レジ袋の向こうに見えるもの

上 廣 哲 治

レジ袋が有料化されてから、はや一年が過ぎました。買い物にはマイバッグが必需品となり、うっかり忘れようものなら、水着を持たずにプールに出かけたときのような「失態感」を抱く人も多くなったようです。その一方で、市販のポリ袋の売り上げが伸びているという話を聞くと、はたしてレジ袋の有料化が「プラスチックに依存する生活」の見直しになっていくのか、疑問を禁じ得ません。現に、家庭のプラスチックごみが減ったという実感を持つている人は少ないのではないのでしょうか。

レジ袋が有料になった背景には、プラスチックごみによる海洋汚染の深刻化が挙げられます。一昨年の三月には、フィリピンのミンダナオ島に打ち上げられたクジラの体内から四〇キロにもものぼる大量のプラスチック袋が発見され、話題になりました。同様の例はアジアのほかの地域でも次々に報告されており、人間がつくった（そして捨てた）物質によって、海洋生物の生命が脅かされ、生態系が危機に瀕していることを強く印象づけました。

また、プラスチックごみは劣化などにより細かく砕けて「マイクロプラスチック」となり、それがひとたび河川や海洋に流れ出てしまうと、回収が困難なため、目に見えないかたちでの環境汚染が進みます。ある環境ベンチャー企業が昨年から今年の春にかけて、全国の河川や港湾などを調査した結果によると、もつとも多く検出されたマイクロプラスチックは人工芝の破片だったといえます。次に多かったのは、農業に携わっていない者には想像もつかないものでした。皆さんは何だと思われませんか？

答えは、稲作用の肥料の粒をコーティングしているプラスチックです。表面をプラスチックで薄く覆った肥料を水田に撒いてしばらくすると、肥料が水に溶け出すようになっており、水田の水を出し入れする際に、分解しきれなかったプラスチックの被膜が河川へ、そして海へ流れ込んでいるというのです。この肥料が開発されるまでは、田植えの時期や夏場に、何度も肥料の入った重いタンクと機械を背負って田んぼを歩き回らなければならず、とくに高齢者にとっては大きな負担になっていました。ところがこの肥料では、コーティング材の厚さや種類を変えることで、中身が溶け出すタイミングを調整できるため、何度も施肥する必要がなく、作業が大幅に軽減されるようになったといえます。

プラスチックは軽くて耐久性にすぐれ、自由に成形できることから、幅広く利用されてきました。現在ではさまざまな製品のどこかしらに使われているといっても過言ではなく、私たちの生活に欠かせないものになっています。まさか肥料にまで使われているとは思いませんでしたが、実際にこの肥料を使用している農家でも、プラスチックの被膜のことを知らない人が多かったようです。

しかし、耐久性などにすぐれているという長所は、そのままプラスチックの欠点にもなっています。それは、基本的に自然に還ることができないということです。マイクロプラスチックのように細かく砕かれ、肉眼ではよく見えなくなっても、消滅することなく環境中に残り続けてしまうのです。そのた

め、これまでに世界で生産された八〇億トンを超えるプラスチックのほとんどが、地球上のどこかに存在し続けているといわれます。とくに海洋汚染は深刻で、イギリスのエレン・マッカーサー財団は、二〇五〇年には海洋中のプラスチックごみの重量が魚の重量を上回るという試算を発表しています。

地球は、資源やエネルギーの「供給源」であるとともに、廃棄物の「吸収先」にもなっています。かつては、「供給源」である化石資源が枯渇する（こかつ）という観点から、レジ袋廃止の動きが起きたことがありましたが、現在ではむしろ「吸収先」の問題が大きく浮上してきています。

人間が自然資源を利用してつくりだしたものが、自然に戻れないまま存在し続ける——。そのことをもっとも厳しいかたちで示しているのは、原子力発電にかかわる放射性廃棄物の問題です。原子力の安全神話は、東日本大震災にともなう大事故によって失墜（しつたい）してしまいましたが、仮に安全管理がうまくいったとしても、原子力発電所からは必ず放射性廃棄物が排出されますし、その多くはたいへんな毒性を持ったまま、自然の循環に還元できずに残り続けます。

放射性物質の危険性を早くから指摘していた科学者の高木仁三郎（たかぎ じんざぶろう）さんは、『いま自然をどうみるか』という著書の中で、『科学と技術の時代』を迎え、私たちは『二つの自然』の間で激しく引き裂かれ、当惑している」と記しています。高木さんがいう「二つの自然」のうち一つは、山川草木（さんせんそうもく）のように私たちが感性的・身体的に慣れ親しんできた自然。もう一つは、近代以降の科学者たちが理論化し、合理主義的にとらえられた自然です。人は、東の空を赤く染めながら昇る太陽にすがすがしさを感じる一方で、それを天体の運行という科学的観点からとらえ、ときには物理学によって解明された核反応の仕組みを、原子爆弾の製造や原子力発電に応用しようとします。

この二つの自然がバランスよく並立すればよいのですが、現代においては第二の自然がますます優勢になり、第一の自然を圧倒しています。自然はもっぱら人間の理性による解明の対象になり、人間の目的のための利用対象になってしまったのです。高木さんはこうした状況を次のように記します。

「西洋近代の科学は、さながら魔術師のように、巧みな技術を自然という玉手箱に適用して、次々といろいろな製品を取り出してみせた。これは天体の核反応までも含めて、人間が巧みに自然の仕かけを盗んでコピーしてきたことを意味しよう。そうやって自然界に君臨し、工業製品に取りまかれ、理性の光を宇宙の涯（はて）にまで届かせはしたけれど、気づいてみるとそのことによって人間は少しも満足していないのである。わが身をふり返れば返るほど、心の中にぽっかり穴があいてしまったような気持を抱かざるをえない」（同書）

科学と技術の進展によって、生活はどんどん豊かになり、また便利になっていくのに、なぜ「ぽっかり穴があいてしまったような気持」になってしまうのでしょうか。それは、人間がどんなに自然界の頂点に立とうとしても、その自然界の一員であり、他の生きものとの共生関係によってしか生きていくことができない存在だからです。自然を克服すべき対象と見なし、そこから富と利益を得ることだけを考える人間中心主義的な姿勢こそが、かえって私たちを不安と危機の中に陥（おとし）れているのです。

日の出とともに行われるわが会の「朝起き」は、そのことを反省し、人間が大自然の摂理の中で生かされていることを体感するための大切な実践です。私たちが肝（きま）に銘（めい）じなければならぬのは、科学技術の過剰な称揚（しょうじやう）でも否定でもなく、それらを含めた人間の営みを自然という大きな世界の中に位置づけ直すことです。生命の根源に対する尊敬こそが倫理実践の基本であることを忘れてはなりません。